

なぜ私は老人ホームに？



三浦さんと筆者が明け方まで向き合ったテーブル

そして「三浦さん、僕たちお別れなんです。あなたは来週、老人ホームに入るんです。ご主人が決めました」と言いました。

「えっ!? そんなひどいこと主人がするはずない! 主人は優しい人です! 私には主人と離れたくない!」。私は胸を詰まらせながら伝えました。

「断腸の思いだったはずです。言えないですよ。最愛の妻が自分を苦しめているなんて。逆の立場だったらご主人に言えますか」

沈黙が流れ、三浦さんは「言えないですね。私が主人を苦しめていたのね」とうつむきました。

私は泣き続けた。どれだけ時間が過ぎたのか、ふとわれに返って顔を上げると、三浦さんは「ニコニコと」老人ホームで治して帰ってくるわ。あなたの時間を奪ってごめんなさい。本当にありがとうございます。もう寝ましようか」と言いました。

私たちが数時間かけて分かち合った真実。謝る私に三浦さんは「全部、分かっていたわ」。そう。覚えてはいなくても全部、分かっていたのかも知れません。

翌朝、三浦さんは、このやりとりを覚えておらず、笑顔で去っていききました。

(金山峰之「介護福祉士」三十二歳)

たとえ、また忘れてしまっても

小規模多機能型居宅介護事業所「ユアハウス弥生」(東京都文京区)のスタッフが介護の実践を報告する。

◆ 次回は来年一月二十六日掲載

「帰らなさいいけないです! どうして出してくれないの!? 誰か助けて!」。ユアハウスの玄関ドアをガンガンたたき、助けを求めた三浦さん(仮名・九十代女性)。興奮はヒクヒクに達していました。

自営業のご主人から、ユアハウス利用の相談をされたのは一年前。認知症の症状が進行していた三浦さんは、介護を受けることを拒否していました。

そこでスタッフの短時間訪問から始め、ほかの利用者さんと自宅でお茶会をしたり、散歩の際にユアハウスに寄ってもらったり…。三カ月かけて関係を築き、半年後には宿泊もできるようになつて、ご主人の介護負担は軽減しました。

しかしその後、引っ越しを機に、ご主人は三浦さんを特別養護老人ホームに入れることに。誰もそれを本人に伝えられないまま、最後の宿泊の夜を迎えました。そして、今まで見せたことのない興奮した姿で、三浦さんは夜勤の私にすがつたのです。

「なぜ私は帰れないんですか!? お願いですから、

「納得」まで真実一つ一つ

何が起きているのか、真実を教えてください!」

私は決断しました。

「三浦さん、真実を知りたいのですね。私が伝えることは受け入れ難いことかもしれないし、ひどく傷つけることになりませんが、よろしいですか。三浦さんの同意を得て、私たちは向き合っていました。

書類などを見せ、私は「これが介護事業所だと伝げました。そして「今日は何月何日ですか」「お子さんは何歳ですか」と聞き、答えられない混乱を自覚してもらった上で、介護保険証と医師の意見書を見せ、その根拠が「認知症」にあることを示しました。

初めは笑って否定し、取り繕っていた三浦さんも、事実を一つずつ突き合わせると、混乱、否定、沈黙、諦め…と表情が徐々に変化。そして、最後に「本当のことを話してくれてありがとう。あなたが教えてくれたこと、感謝しています」と納得の言葉を述べ、続けて「これからもよろしくね」と言いました。

その言葉に、私は感情を抑えきれなくなりました。